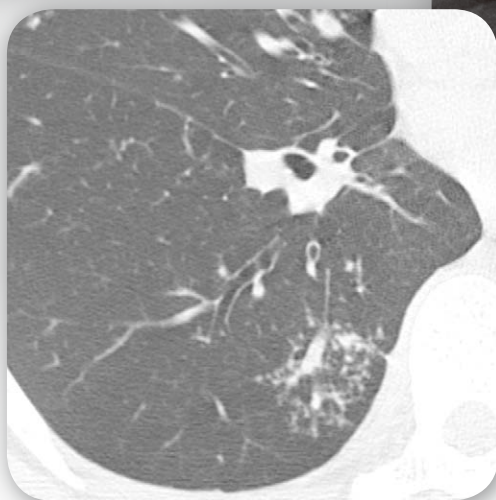
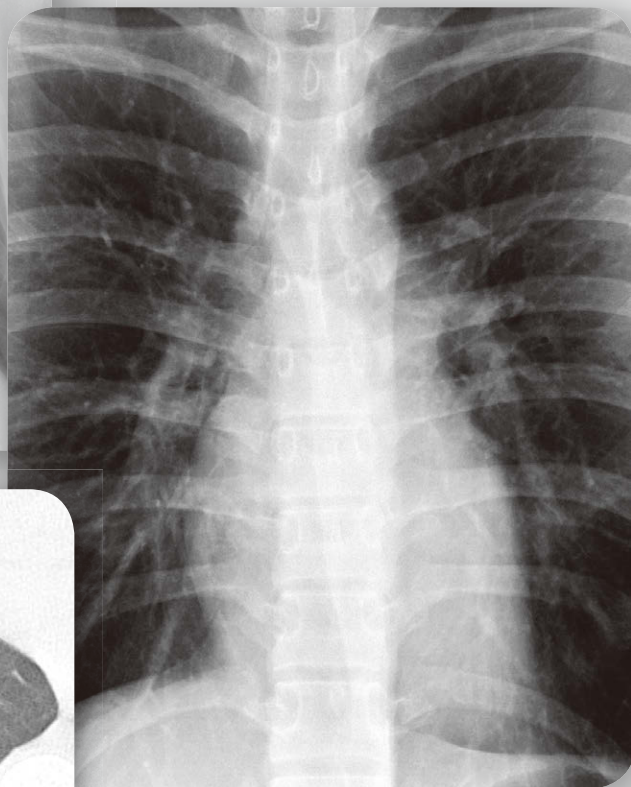
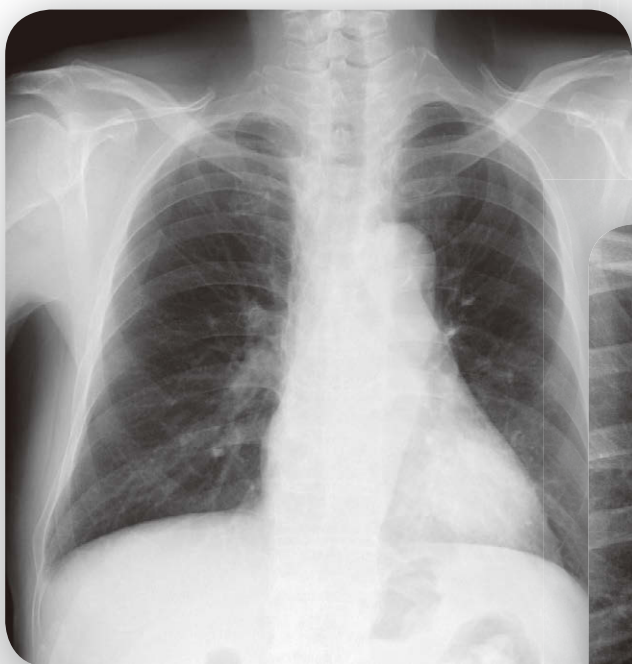


特 集

かすかな所見から



(写真：p. 1363, 1379, 1413より)

ひも解く胸部画像診断

序説

胸部単純X線写真で、正常か異常かを見きわめたうえで、骨・心臓・縦隔・肝に重なった領域、肺門の濃度差、縦隔線や心辺縁の凹凸、見えるべきものが見えないなどのかすかな所見に注目すると、重大な病変の発見のきっかけになることがある。

また、症状が出現してから発見される病変は、増大あるいは進行した状態も少なくないが、異常陰影の経過観察のために、あるいはたまたま別の理由で撮影された過去の胸部単純X線写真またはCTを後方視的に振り返ってみると、その初期には直接的にまたは間接的にもかすかな所見を呈していることがある。その時点では、炎症か腫瘍か、あるいは良性か悪性かの鑑別に難渋することがあり、経過観察しているうちに増大していたことがあり、悔やまれることもある。しかし、初期の段階で、重く考えすぎるとoverdiagnosisとなり、軽く考えすぎるとunderdiagnosisになりかねない。

現在広く普及している読影端末では、容易に過去画像を閲覧できるようになっており、初期像を改めてじっくり比較してみると、疾患特異的な特徴像や片鱗が描出されている場合もある。初期の段階でかすかな所見を過不足なく拾い上げ、また「どの時点で診断可能か」がわかれば、早期発見・早期治療につながると思われる。

以上のような観点から、“かすかな所見からひも解く胸部画像診断”と題して、正常か異常かを「見きわめる」、肺腫瘍性、病変炎症性肺疾患・間質性肺疾患・肺結核では「診断可能な初期像をとらえる」、肺血管性疾患では「血管らしさに注目する」、縦隔病変・心大血管病変では「辺縁に注目する」という観点から本特集を企画した。

執筆をお願いしたのは、各領域において豊富な臨床経験を有し、最前線の日常診療に携わっておられる先生方ばかりである。各執筆者にはご多忙にもかかわらず寄稿いただき、厚く感謝する次第である。本特集が多くの読者にお役に立てれば幸いである。

松永尚文